

30amS-006

薬学生のバイタルサインの認識、学習状況に関する調査

○玉田 賢弥¹, 松崎 哲郎¹, 中島 大理¹, 橋崎 友厚¹, 小林 大翼¹(¹日本薬学生連盟)

目的

社会の高齢化に伴い、薬剤師が在宅医療に携わる必要性は広く共有されている。在宅医療では、薬剤師にはバイタルサインの知識や測定能力が求められるため、薬学教育の一環としてそれらの修得が必要であると考えられる。しかし、薬学生がこの実情をどれほど認識しているのか、大学でどれほど教育が行われているのか、に関する調査は今まで行われていない。そこで、これらを調べるため、バイタルサインの認識、教育状況に関するアンケート調査を薬学生を対象に行った。

方法

2012年12/9、12/23に行われた日本薬学生連盟主催の企画「在宅医療就活セミナー」にて、来場した薬学生115名に対しアンケートを実施した。

結果

9割以上の学生がバイタルサインは在宅医療に必要と回答していた。また85%の学生がバイタルサインに関する講義又は実習を履修していた。自由記述欄では、33%の学生が講義、実習の不十分さに関する意見を記載していた。

考察

回答者の多くが大学でバイタルサインに関する講義があると回答していた。しかし、少なくない学生が教育は不十分であると回答していた。バイタルサインに関する教育を再考する事は、在宅医療に適した薬剤師育成に繋がると考えられる。